

報告タイトル

李登輝の対日観におけるアジア主義の考察

Lee Teng-hui's views on Japan and Asianism

氏名(所属)

陳柏宇 (新潟県立大学)

CHEN Boyu (University of Niigata Prefecture)

要旨

1988年に就任してから2000年に退任するまで、大統領任期中の李登輝は、国民党政権でありながら、2000年以降の国民党は「親中」、民進党は「親米」と思われる二項対立的認識とは異なり、独自の外交路線と主張した。李登輝は台湾の主体性を強調し、「親日台湾」のイメージを打ち出す一方、国共内戦の対立構造からの脱却も試みた。本報告は、李登輝の対日観には、日本が大きな役割を果たしている「アジア主義」を核心としていることを指摘したい。

中国国民党の「アジア主義」に関する議論は、孫文にまで遡る。孫文は、辛亥革命が起こる前に、日本のアジア主義者との親交があり、影響を受けている可能性がある。成立したばかりの「中華民国」と日本の連携を、アジア主義の考え方から模索していた。当時西洋の帝国主義が、アジア諸国を準植民地扱いし、アジア諸国が不平等な地位に置かれてしまった。孫文は、アジアのルネッサンスの出発点は日本だと論じた。日本が不平等条約を撤廃し自立を果たしたことは、アジア人が主人公となるだろうという希望を、アジア諸国に与えたからである。

李登輝は日本が先頭に位置し、アジア経済成長を引き起こす「雁行モデル」を強調する。アメリカと台湾の関係を重視するよりも、日本と台湾の連携を願い、日本が自信喪失からの脱却を志し、アジアのリーダーシップを取るべきだと主張した。李登輝はより日本を信頼し、アメリカへの態度が微妙である点は、ほかの台湾指導者と区別がつく。李登輝が考える「アジア主義」の背景には、日本教育を受けた経験と「京都学派」の哲学、特に西田幾多郎の影響が大きいと言えよう。

本報告では、李登輝の演説、インタビュー記録、著作、また中華民国の歴史編纂を目的とする国史館のアーカイブなどを分析し、李登輝の対日観におけるアジア主義の論理を明らかにする。